

崔書勉先生と私 『スユクと旦那』

毎日新聞 鈴木 琢磨

ソウルは景福宮そば、内需洞といえ、朝鮮王朝時代の大蔵省とでもいうべき内需司に由来する。いつからかは存ぜぬが、われらが崔書勉の旦那はここに住んでおられる。ひよつとして太っ腹なのはそのせいかもしれぬと思ったりするが、本人の弁ではあの腹中にはカネでなく、知識がつまっているらしい。

その日はひとりの従者もなく、電動車いすを自ら操縦しながら、夕暮れの都大路を悠然とわたって、老舗のコムタン屋「白松」に現れた。むろん上客のなかの上客である。奥の座敷に通されるや、ほどなく「名品スユク」が運ばれてくる。看板は牛骨スープのコムタンだが、あえてとろけるほどやわらかい熱々のスユク（ゆで肉）を客人に供するところが心憎い。「ソウル中を探してもこれだけは見当たらないからね」。ヒゲが笑っている。

使うのはキープしてある木製のはし。呑むのは日本酒の熱燗。「わが韓国の金属製のはしは重くていかんよ。酒はやっぱ熱燗に限る」。東京からの旅人には興ざめだが、マツコリでも呑みたい気分をぐっと抑え、こちらも熱燗をちびちび。

「このごろは韓国の新聞は読まんよ。すっかり漢字を使わなくなったからね、読みづらくてしかたない」。まさか親日派？と思いきや、座敷にはなにやら航空写真がかかっている。ああ、例の島だ。

いくら青瓦台にも近いからといって、酒の席にまで愛国印の島がおでましになつてはかなわぬ。せつかくのご馳走がますますなくなつてしまいますわ、と嫌みのひとつも述べたかったが、こらえた。旦那はといえば、とろとろのスユクをいかにもうまそうにゆっくり熱燗で流しこんでいる。まさに大人の風情。「ところで、今回は何の用だね？」。「まあ、ソウルの空気を吸いにきただけでして」。そんな禅問答もどきのやりとりだけでいい。新聞記者にとって最高のご馳走がやってくる。

そう、日韓の歴史、その裏表を知りつくす旦那の時局解説「崔書勉アワー」である。太鼓腹にしまつてあつたのか、おしげもなくとつておき政界秘話を開陳され、かつ最新情報も極上ものばかり。その語り口が昔のイヤギクン（語り部）もかくありなんと思われる至芸ときているから、韓国の新聞社の幹部もしばしばここで耳の穴をほじり、スユクをつつくことにな。ちなみに李明博氏はここで大統領選挙の知らせを待っていたし、近くの姉妹店「大松」は前国連事務総長、潘基文氏のひいきという。韓国の政界はスユクでできているらしい。で、記事のヒントを得て喜ぶほろ酔い異邦人記者を尻目に、旦那はちやつかり美人おかみとじゃれあっている。その芸がまた名品中の名品だ。

都大路が騒がしい。旦那、最後の出番である。今宵も電動車いすは「白松」へ向かっているだろう。いつもよりスピードを上げて。



